



月刊 労働千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒280 千葉市要町2番8号(動力車会館)

電話 | (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 千葉 (22) 7207 番

90.8.3 No. 3263

北海道事業団を歩いて

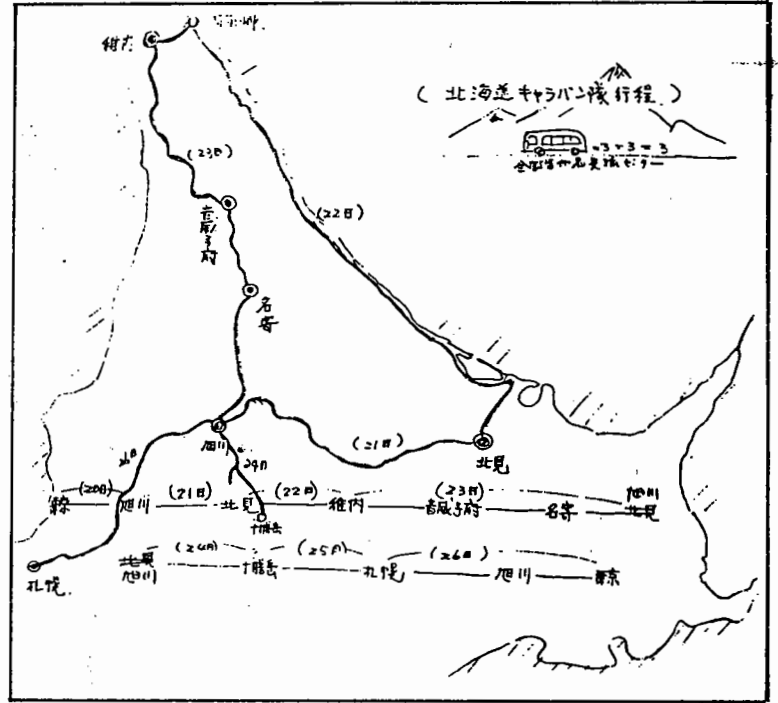
= 『全国キャラバン隊』に随行して =

四月一日、二度にわたりに不当にも、首を切られた清算事業団の仲間、今争議団として、新たな闘いを開始している。全国的にも、国労を中心に千人をこえる清算事業団の仲間と家族が困難な境遇にも負けず、闘いの勝利を確信しながら「闘争団」となって、したたかに闘いつづけている。

こうした中、争議団として奮闘している高石正博さんが、全国交流センターの「全国キャラバン隊」と寝食を共にしながら、七日間にわたり北海道オルグをやりきり元気に帰着しました。本当に御苦労さまでした。高石さんからの報告の一部を掲載します。

仕事も少なく生活の不安もあるが しかし北海道の仲間 たちは敗けていない

高石正博 (注清算事業団、被解雇者)



私が7月20日から北海道の各地の事業団闘争をまわり、交流し感じたことは、国労本部の十分な指導が見られない中にも、仲間を信じ、しっかりと団結を固め、家族ぐるみで頑張っている姿にふれ、私自身も不当に解雇された身ですが、体の中心からジーンと熱くなるものを感じ、多くのことを学んだという言葉につきる。

正直いって、彼ら組合員の中には、本部への不満や批判もかなり見受けましたが、「だからといって、投げやりになり、

7月二二日
北海道の最北端の事業団、稚内に入る。夕方、稚内駅頭で街頭演説とピラまき決行。ピラの受けとりはすごい。ガンバレという励ましもひっきりなしである。地域住民が、本当に清算事業団の人たちに心を寄せ、注目しているのが良くわかる。

7月二〇日
日をおって見ると(その一部)

旭川に到着。そこで交流センターのキャラバン隊と合流。市内宿泊。

7月二二日

早く起きて北見事業団に向かう。「交流センター」のメンバーもワゴン車で東京を出発してから九日間になるが、疲れも見せずワイワイやりながらの移動である。

一八時より交流会を行う。北見事業団からは、団長・副団長を含め七名が出席、全員が心から歓迎してくれ、時間のたつのも忘れ話があった。(内容はおいて、又、)交流会の最後に皆から「労働千葉に学びたい」「お互いにつらいこともあるだろうけど頑張りたい」と握手され、別れを惜しみながら再会を誓って次の地にむかう。

終了後、稚内闘争団との交流会に入ると。彼らは電気も切られ、ランプ生活が強いられている。毎日交代で、ろう城しているのである。私たちもランプの光の中で深夜まで語りあい、笑いあい、熱のこもった交流を行った。中でも印象に残ったのは「本部、本州の仲間もつと我々のことを知って欲しい、自分たちは生活を守りながら闘うためになんでもしていく決意だ。冬場の生活確保は大変な苦労が予想されるけど、物販や東京へのアルバイトなどやりながら最後まで闘う」と一言一言噛みしめるように語られる言葉に胸が打たれた。仲間たちが用意してくれたジンギスカンの味は今でも忘れられない。私は、彼らから多くを教わり、感動と興奮でなかなか寝つけなかった。